

成年後見実践を行うソーシャルワーカーの「問題」認知に関する一考察

ー社会福祉士が問題から脱却するプロセスー

○社会福祉士事務所「福まね」 齋藤弘昭 (008133)

キーワード：成年後見、問題認知、援助関係

1. 研究目的

成年後見実践を行うソーシャルワーカーには、「身上保護」と呼ばれる生活支援及び問題解決のための関係調整が期待される。特に、「問題」を抱えるケース、いわゆる「困難ケース」を上手に調整することが期待されることが多い。しかし、その「問題」に対する認識は、個々のソーシャルワーカーにより異なり、「問題」に対する認知や対応方法は様々である。後見実践を行うソーシャルワーカーは、どのように「問題」を認知し、その認知は援助関係にどのような影響を与えているのだろうか。さらに、援助関係における「問題」に定義を与えることはできるか等、ソーシャルワーカーが捉える「問題」に焦点を当て、「問題」の分類及び「問題」へのアプローチを考察する。

2. 研究の視点および方法

本研究は、研究目的を達成するために、成年後見業務を行う10名の社会福祉士成年後見人等に対してインタビューを実施した。インタビュー調査は、2021年4月から7月にかけて、半構造化インタビュー法を用いて一人60分程度、オンラインで実施した。分析方法はM-GTAを採用し、インタビューの語りを整理・分析した。まず、中心的な一人の語りについて、語りの流れの中からキーとなる概念を抽出し、概念定義、概念の意味づけをまとめた。さらに、全員のインタビューから、新しい概念を加えて整理した。

3. 倫理的配慮

インタビュー実施前にインタビューガイドを渡し、インタビューの目的及び内容を説明し同意を取った。また、今回の調査は「ソーシャルワーカーの後見業務における『問題』認知に関する事柄であり、援助内容に関する質問はしない」旨、事前に説明した。情報の管理方法並びに使用目的を明らかにし、個人情報に関する取り扱いを説明した。また、原稿作成に当たっては、日本社会福祉学会の研究倫理規程及びガイドラインを遵守した。

4. 研究結果

インタビューを行なった全てのソーシャルワーカーが、援助関係における「問題」の定義を行なっていることがわかった。「問題」についての概念を次の7つに分類し、それぞれの概念定義とソーシャルワーカーの「問題」に関する認知をまとめた。(表1)

概念	定義	SWの認知
1、問題からの汚染	社会生活を送る上での「障害」及び「障害となる行動」やその環境を「問題」として認知する行為そのものが、問題からの汚染を生む。支援を求められた場合、それに反応することから生じることが多い。	困難ケースだという認知。クライアントの問題を、私が解決すべき問題として認知。関わり=強い。関係性=密。

2、問題の分離	問題は、クライアントの個性である。ワーカーは問題と一定の距離をとり、できるだけ客観的に関わる。問題の本質には接近せず、問題の周辺現象を取り扱う。専門的に分析評価を行うことが多い。	問題はクライアントに内在すると認知。客観的に対処しようとする専門的感覚。関わり＝強い。関係性＝均衡。
3、問題の膨張	クライアントや関係者からの依存、依頼が強くなり、圧倒されている状態。問題に接近することで、問題の本質、意味が不明確になる。ワーカーの「解決したい」という意識が「問題の膨張」を作る。	クライアントの不安を受け止めワーカー自身の不安全感がある。問題に圧倒されている。関わり＝弱い。関係性＝薄い。
4、問題の固着	問題を解決するプロセスにやりがいを感じる。クライアント個人より「問題」そのもの、あるいは、問題の解決に焦点が当たっている状態。専門的関わりをしている状態であり、やりがいを感じる。	ソーシャルワーカーの人生観が「問題」を作る。クライアントの表情や言動にゆれる。関わり＝強い。関係性＝密。
5、問題の除外	ソーシャルワーカーの価値観やスキルにより「問題」が見えたり見えなかったりする状態。「問題」を作りたい人が「問題」を作ると感じる。クライアントはそれを「問題」とは感じていない場合が多い。	それは私の課題ではないと認知し、クライアントが解決すべきだと解釈する。関わり＝弱い。関係性＝均衡。
6、問題の消失	「問題」は人生のスパイスであり、世の中を面白くする作用がある。問題を認知することには意味があり、何かを代弁していると認識する。または、そもそも問題ではなかったという感覚。	問題が消えてしまった。あるいは、問題を問題視しない姿勢。問題の外在化。関係性＝均衡。関わり＝均衡。
7、問題との交流	問題を抱えている人や環境との関係を調整する。ワーカーは「問題」との一定の距離をとり、相互交流をしている。問題に深く関わることも、問題を客観的に観察することもできる自在な距離を取る。	支援者としての役割や機能を自覚し、自分の能力に応じた関係をとる。関係性＝均衡、関わり＝均衡。

5. 考察

ソーシャルワーカーは「問題」について次のように述べている。「問題があるから私たちの仕事があり、専門性を生かせる場面がある。難しいと言われる問題を解決した時、ソーシャルワーカーとしての価値がそこにある」。つまり、ソーシャルワーカーとしての価値を「問題解決」にあると認知している。7つの問題に関する概念は、問題へのアプローチを考える上で、自分が今どの状態であるのかを確認する指標となる。また、ソーシャルワーカーの問題認知は、ゆらぎを伴うことが多く、相互関係のバランスを調整している。問題認知プロセスは、問題の「汚染」から始まり、「分離」「膨張」「固着」という段階を経て、「除外」「消失」「交流」という段階に移行する。一方、「問題」認知プロセスは、一方向に進むわけではない。また、「問題」を概念化することや言語化することで「汚染」が始まる。つまり「問題」が語られなくなるに従い、「問題」の本質が変容する、あるいは消失する。